

目的 衣服の型くずれの要因の一つに布のバギング性がある。この性質は、具体的には衣服の「膝抜け」とか「肘抜け」などと結びつく性質で、着用中の膝や肘の動作によって生じた布の変形が、永久変形として残留し、衣服の外観を低下させる欠点である。バギング性は、基本的に布の変形・回復特性が密接に関係してくるが、衣服はパーツを縫合して構成されるために、縫目を含めたバギング性の議論が必要な場合がある。たとえば2枚袖の肘部では、縫目線が肘の曲部にかかるようなケースが実際によく見受けられる。本研究では以上の観点から、縫目線を含む布帛に着目し、縫目の存在の影響、縫糸物性、縫製条件などとの関連について検討することにした。

方法 試布は2種類の毛織物（平織、綾織）、縫糸には合繊フィラメントミシン糸（ポリエステル、ナイロン）を選択した。試布は100×60 mmに裁断し、本縫いミシンにより長辺を縫代10mmでステッチ密度を変えて縫製し、縫目を割って試料とした。バギング評価は、J I S法の定荷重法（B-1法）によったが、縫目線位置は中央とし、縫代側から押圧荷重を加えた。荷重の水準はJ I S法の条件を含めて数段階設定した。また試験直後のサンプルの写真を撮り、バギングを観察した。

結果 縫目を有する布帛のバギング性は、荷重の水準が低い場合には縫目の影響は大きくないが、水準が高くなると影響が出てくるようになる。ステッチ密度が小さいと、バギングは増大する傾向にあり、また縫糸物性も影響する。一方、縫代の影響が外観評価を含めて存在した。